

## ル・コルビュジェ 諸芸術の総合 1930-1965

パナソニック汐留美術館 25.01.11~03.23



建築家「ル・コルビュジェ」(1887~1965)は、活動の後期において建築の指揮の元で「絵画」や「彫刻」をつなぐ試みを「諸芸術の総合」と表現した。

この「諸芸術の総合」とは、統一、調和、普遍的法則の理想主義に導かれた彼の芸術観全体を示すスローガンでもあった。彼は、近代建築の巨匠として世界的に知られているが、視覚芸術の他分野においても革新をもたらしている。

本展は、1930年以降に手がけた「絵画、彫刻、タペストリー」の展示で、求め続けた新しい技術の芸術的利用にもスポットを当てて、後期の建築作品も併せて紹介して、伝統的な枠組みを超えた円熟期の芸術観を明らかにしている。

ル・コルビュジェ 《マッチ箱と二人の女》 1933年 チラシ右図

絵画といった資格芸術においても革新をもたらし、1918年から10年間、幾何学的な構成による「ピュリスム」の絵画制作し、1930年以降の円熟期には、午前には「絵画」を手がけ、午後には「建築」の仕事を行っていたとされる。

ル・コルビュジェ 《手》 1957年 チラシ中図

ル・コルビュジェ 《レア》 1963年 チラシ左中図

シュルレアリスム的な表現で描かれた自然界への関心のもとに手がけた作品。